

大通公園を望む窓辺から

生成AI

会長 松家 治道 まつか はるみち

2022年にOpenAI社からChatGPT (GPT3.5) がfreeでリリースされ、会話型文書生成AIや画像生成AIに耳目が集まりました。その文書の自然さ、多彩な応用範囲が高く評価される一方で、問題点の指摘も進んでいます。

「AI界のゴッドファーザー」J・ヒントン氏は、Googleを退社し、「生成AIの普及で偽の画像や文章が氾濫し、真実がわからなくなる可能性があり、長期的なリスクとして、完全に自律したAI兵器が生まれる可能性もあり、悪用を防ぐ方法が見つからない、想定以上にAIが進化している」と警鐘を鳴らしています。またイーロン・マスク氏らも、NYT紙に「AIの開発は半年遅らせるべき」との広告を掲載しました。対して、OpenAI社はサイバーセキュリティやバイオリスクなどの分野の50人を超える専門家と協力してテストし、危険なリクエストへの回答を拒否するよう訓練がされ、有害な出力が大きく減少したとしています。しかし文書生成AIには情報の正否を判別する能力はなく、膨大な偽情報を撒かれた場合人力でのファクトチェックは不可能となる恐れは残ります。

さて、ここで医療においてのChatGPT利用の問題点を考えてみましょう。1) 誤った情報や診断の提供、2) 責任の所在、3) プライバシーと機密性の問題、4) データのバイアス、5) 患者の適切なケアの欠如、6) エンパワーメントの欠如、7) 倫理的な同意と情報の不足などです。と、ChatGPTが答えてくれました。一見、至極まっとうに思えますね。

東大次世代知能科学研究センターの松原仁教授は「技術が進んでしまった以上、受け入れるしかない。成長や進歩を押さえつけるのは無理です。AIは地球を救ってくれるかもしれない天才。悲観ばかりして捨ててしまったら、別の国が悪い子に育ててしまうかもしれない。AIと共存する未来から逃げられないのです」とします。一方でヒントン氏は、自らが引用していた、オープンハイマーの「魅力的な技術があったら、思い切ってやっつけてしまえ」という核開発にまつわる言葉をもう口にしようとは思わない、と語っています。

今回の広島サミットでは生成AIが抱える著作権侵害や偽情報などの課題に対する見解を集約する「広島AIプロセス」への着手で合意もありましたが、皆さんはどう思われますか？

スーパースター藤井聡太七冠
小樽・銀鱗荘へやって来る監事 阿久津光之 あくつ みつゆき

史上最年少で昇段を果たしその後無敗で公式戦最多連勝の記録を樹立され、将棋ブームが起こり社会現象的な「藤井フィーバー」となっております。その藤井七冠が七月末の王位戦で小樽・銀鱗荘に来ることが報道されました。

銀鱗荘は小樽老舗の料亭で温泉旅館のひとつです。鯨で栄華を極めた余市の大網元屋敷を1938年に小樽市の東に位置し石狩湾を一望できる高台に移築された豪壮な建物で小樽市の指定歴史的建造物の一つです。

さて話が戻りますが、藤井聡太フィーバー報道では対局時の食事(勝負飯)やご当地の勝負おやつが画像付きで紹介される結果、勝負おやつは、その後販売数を増やし名前が広がると言われています。小樽の勝負おやつが何になるか楽しみです。小樽のお菓子文化といえば、古くから餅文化があり一時餅屋が100店舗以上あったと言われております。諸説がありますが北前船や海に出る者たちに餅が縁起物であったことや大正時代に北前船での米の集積地であると同時に小豆や砂糖の集まる街だったことが餅文化を広めたと言われております。最も古い餅屋は江戸時代創業で150年を超えた店舗があります。それらの中から私見ですが、3店舗の餅屋から選ばれるのではと思っております。1店舗目は餅菓子のみのももちで創業75年大福、べこ餅、みたらし団子で全て手作りの餅屋(正月餅はMもちにこだわるファンあり)。2店舗目N屋(別名Hだんご)は創業128年を経た古い老舗で商品を増やし和菓子も扱っておりますが5種類の団子は小樽名物だんごとして市民に親しまれております。3店舗目は今年で93年目を迎える菓子処Rです。当初、6つの味の「すあま」を小樽駅売店で販売すると好評となり市民に認知され、時代とともに創作和菓子販売するようになりました(自家製の特徴的な餡にこだわった和菓子作りで東京の催事出店では長蛇の列ができると言われています)。

王位戦で藤井聡太七冠が選ぶ勝負おやつの中に小樽の歴史ある餅菓子が選ばれることを期待しております。

